様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５７７

研究課題名（和文）西欧文学にみる反デモノロジーの精神史

研究課題名（英文）The History of Demonology in the European Literature

研究代表者
高橋　義人（Takahashi, Yoshito）

平安女学院大学・国際観光学部・教授

研究者番号：７００５１８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパの歴史は、デモノロジー（悪魔表象）というキリスト教の根本思想、およびその反対運動を知らずには理解することができない。本研究会では、田村和彦がナチズムというデモノロジーとそれに反対したトーマス・マンについて、ウェルズ恵子は、黒人差別という形で受け継がれたデモノロジーに対する反対運動について、高橋義人は、キリスト教デモノロジーに大きな影響を与えたグノーシスとその反対運動、ルターのデモノロジーに反対しつづけたエラスムス等について発表するとともに、活発な議論を交わした。高橋はその研究成果を『悪魔の神話学』（岩波書店）という書物としてまとめ、堕天使、原罪等とデモノロジーの関係について論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高橋義人の単著『悪魔の神話学』は、雑誌（『AERA』2018年7月23日号）で取り上げられた他、毎日新聞朝刊紙上の書評欄で、佐藤優氏（2018年12月9日）、村上陽一郎氏（2018年12月16日）で「今年の３冊）に選ばれた。『AERA』誌上で佐藤氏はこう書いている。「『悪魔の神話学』で高橋義人氏は、日本の西洋史では軽視されている悪魔が持つ思想史的域について、詳細かつわかりやすく説いている」と。2003年4月9日にW・ブッシュ大統領II世はサダム･フセインを「悪の代表者」、すなわち悪魔の結託者と呼んだが、本研究は、西洋社会を動かしているデモノロジーとそれに対抗する運動の理解を促進するであろう。

研究成果の概要（英文）：Without deep knowledge of the demonology (ideas of the devil and demons) and of the arguments against it one could hardly understand European history. This study has aimed at exploring diverse dimentions of demonology and the related arguments, both for and against it, from different points of view. In our research group, Tamura analyzed Thomas Mann's objection to the National socialism, which is, without a doubt, a modern form of the demonology. Wells examined the racial discrimination in the USA, which, according to Wells, is based on the tradition of European demonology. Takahashi reported about the role of Gnosticism in the Christian history and about Erasmus, who fought vehement against the Luther's demonology. Takahashi published the result of his above research and analysis in the book, Myth of the Devil. This book won very favorable reviews in the Mainichi newspaper by two reviewers in December 2018, and was selected as one of the three important books in the year 2018.

研究分野：ドイツ文学思想

キーワード：デモノロジー　悪魔　キリスト教　堕天使　原罪　グノーシス　ルター　唯名論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

１．研究開始当初の背景

キリスト教が始まって以来、ヨーロッパ人は神のみならず悪魔の存在を自明のことと見なし、「この世はすべて神と悪魔の戦いである」「人間はたえず悪魔の誘惑にさらされている」と考えてきた。当然のことながら、それに対する疑義申し立ても多数あった。ヨーロッパ文学には、そうした双方の見解――悪魔の存在を自明のものと見なす見解と疑わしいとみなす見解――がともに深く刻印されている。それを読み解くことによって、文学の面から西洋の新たな精神史を構築できるのではないか。そしてそれには西洋文学内の国境の壁を取り払った共同研究が必要である。それが本研究の出発点をなしている。

２．研究の目的

西洋の文学作品のなかに、デモノロジーと反デモノロジーの伝統を読み取り、それによって西洋の新しい文学史と精神史を構築するのが目的である。

３．研究の方法

デモノロジーという視点の下に西洋の新しい文学史を構築するとは、従来の文学史をほとんど書き直すことを意味している。そのため、本研究を推し進めるには、ドイツ文学のみならず、英文学、仏文学、ロシア文学など、多分野の研究者が一堂に会した広範な研究が好ましいが、デモノロジーと文学の関係に関心を寄せる研究者が日本にはそれほど見当たらなかったため、今回は領域をとりあえずはドイツ文学と英米文学に絞り、次いで、できる範囲内で研究代表者・分担者以外の協力も仰ぎ、ヨーロッパの他の地域の文学にも眼を注ぐことにした。

４．研究成果

１）ドイツ

１a）ルター対エラスムス

ルネサンス以降のデモノロジーの主唱者はイタリアのサヴォナローラとドイツのルターだった。サヴォナローラは、美と愛という異教的文化を満喫していたフィレンツェの人々に、改心せよ、悔い改めよ、さもないと、お前たちは悪魔の術中に陥り、地獄に墜ちるぞ、と迫った。

同じように考えたのが、ルターだった。彼の『奴隷意志論』（1525）の根底には明らかにデモノロジーがある。この世の外には神と悪魔がいて、両者はそれぞれ少しでも多くの人間の魂を手に入れようとしている。ルネサンス以降、自分には自由意志があると思いこんでいる人が増えているが、しかし人が善の道に進むか、悪の道に進むかは、神と悪魔の意志によって決まる、だからこそ人は神に愛され、悪魔の近づかぬよう、清く正しい生活を送らなければならない。これがルターの主張である。

これに真っ向から反対したのがエラスムスだった。彼は、ルターの『奴隷意志論』の一年前に『自由意志論』（1524）を書き、ルター説を否定した。彼は言う。「善はすべて神の恩恵による」と。悪は悪魔に起因しないが、善は神に起因する。こう言いながらエラスムスは、明示的にでこそないものの、西欧のデモノロジーときっぱりと縁を切っている。キリスト教は長いこと神の存在のみならず悪魔の存在を信じてきたが、しかし今や自分は神のみを信じ、悪魔の存在は認めない。そう彼は言っているのである。

１b）カントの根源悪

もともとカント的啓蒙主義は人間の自由を高らかに称揚する哲学だった。しかし『単なる理性の枠内における宗教』においてカントは人間的自由に大幅に制限を加えた。この書のなかでは２つの立場が相拮抗している。人間を自由な道徳的主体と見なすかぎりにおいて、カントはエラスムス主義者である。だが、人間が「根源悪」という悪の性癖に支配されうると認めるかぎりにおいて、カントはルター主義者である。「根源悪」は、カントがそれまで主張してきた啓蒙主義を修正ないし制限せざるをえない概念であり、この概念を導入したことによって、彼はもはや人間を完全に崇高な存在としてではなく、悪を犯す可能性を秘めた薄汚れた存在と見なすにいたった。この点に強い嫌悪の情を抱いたのは、長いことカント哲学の愛読者だったゲーテだった。1793 年 6 月 9 日付けのヘルダー宛ての手紙のなかで、彼はカントの『単なる理性の枠内における宗教』を手厳しく批判した。「人間を誤った先入見から解き放つべく人間の生の考察をつづけてきたカントは、自己冒瀆もはなはだしいことに、哲学の顔に「根源悪」という泥を塗ってしまった。まるで司祭の前に恭しくひざまずき、キリスト教徒に媚びを売らんとするかのように」と。『単なる理性の枠内における宗教』はカントの自己冒涜、言い換えれば自己否定であるというのだ。

ゲーテの慧眼は見抜いていた。カントは「根源悪」なるものを提起したことによって、M・ルターの奴隷意志説と、アウグスティヌス的原罪説にかぎりなく近づき、キリスト教との妥協を図っていることを。それは、ゲーテにとってとうてい許せないことだった。

奴隷意志説と原罪説は、キリスト教デモノロジーを支える重要な柱である。啓蒙主義時代の申し子であったカントは、悪魔の存在も原罪に関する教説も認めていないはずだったが 、しかし一見するとそれらとは無縁な哲学的な「根源悪」なるものを持ち出すことによって、彼もまたキリスト教デモノロジーのなかに絡み取られてしまった。それは自らの批判哲学に対する裏

切り行為である。ゲーテは明らかにそう言っているのだ。

１c）T・マンの『ファウストゥス博士』

第二次大戦後、アウシュヴィッツ収容所等が解放され、ナチス・ドイツが行った残虐行為が明らかになると、世界中がドイツ人全員を糾弾した。そのさなか、トーマス・マンは小説『ファウストゥス博士』（1947）を発表し、さらには「ドイツとドイツ人」と題する講演を行った。このなかで、彼はナチスを悪魔と結びつけるとともに、悪魔への偏執狂的な執着は、ルター以来、ドイツのなかに巣食っていたものだったと言っている。「悪魔は、ルターの悪魔もファウストの悪魔も、私にはきわめてドイツ的な形姿のように思われて仕方ありません。悪魔と盟約を結ぶこと、魂の救済を放棄してしばらくの間この世のあらゆる富と権力を手に入れるために悪魔に身を売り渡すことは、ドイツ的本質に近いものがあるように思われてなりません。この世の悦楽と世界支配への欲求から魂を悪魔に売り渡す孤独な思想家、研究者、僧房に閉じこもる神学者、哲学者――ドイツが文字どおり悪魔にさらわれている今日こそ、ドイツをこのようなイメージにおいて眺めるのにまさにふさわしい時機ではないでしょうか。伝説や文学作品がファウストを音楽と結び付けていないのは、大きな誤りです。ファウストは音楽的であるべきでしょう。音楽家であるべきでしょう。‥‥なぜなら、ドイツ人の世界に対する関係は、抽象的にして神秘的、すなわち音楽的だからです」（青木順三訳）。

ヒトラー政権下、ドイツ人全体が悪魔と結託していたかのように述べたマンの言葉はドイツ本国で大きな反感を巻き起こした。事実、ドイツ国内にもナチスに抵抗した人々は多数いたのだから、ドイツ人全体が悪魔の忠実な弟子であったというのは明らかに言いすぎであったろう。

だが、かりにナチスの党員を「悪魔の弟子」と見なすならば、ドイツ人のナチス党員はみな「悪魔の弟子」と見なされても仕方ない。

なぜドイツ人はナチズムなどという狂気に身を染めてしまったのか。マンは、デモノロジーの伝統がいかに深くドイツのなかに巣食い、それがナチズムの淵源になっていたかを明らかにしようとしている。〔以下略〕

２）英米

トーマス・マンはデモノロジーの伝統をドイツにばかり求めたが、じつは英米文学やフランス文学にもデモノロジーと反デモノロジーの伝統がある。

２a）シェイクスピアの『マクベス』

英文学で真っ先にデモノロジー文学の代表として挙げられるのは、シェイクスピアの『マクベス』であろう。この戯曲のなかには三人の魔女が二度、重要な場面で登場する。

第一幕の幕が上がると、雷鳴と稲妻のなか、３人の魔女が登場し、「きれいは汚い、汚いはきれい」と言う。一般社会にとって「きれい」であるものは、魔女たちにとっては「汚い」であり、「汚い」と呼ぶものは彼女たちにとっては「きれい」である。ここでシェイクスピアは、魔女たちの世界では価値が転倒していることを示している。そしてこの言葉は、第一幕第３場でマクベスが魔女たちに言う言葉「こんないやな、めでたい日もない」に明らかに対応している。

三人の魔女は「雷鳴と稲妻」のなかに登場する。これは、彼らが「天候魔女」（Wetterhexe, weather witch）であることを示している。彼らは策略をめぐらす。例の「荒野」で落ち合い、マクベスに会おう、と。ここでも魔女は「不毛」と結びつけられている。

では、はたしてシェイクスピアはこの戯曲のなかで魔女を現実に実在するものとして描いたのか、つまり彼は魔女の実在を信じるデモノロジストだったのか、それとも魔女をマクベスやマクベス夫人の心の反映として描いたのか、つまり心理ドラマ作家だったのか。

魔女実在説論者だったという見解の拠りどころになるのは、第一に、マクベスだけでなく、バンクォーも魔女を見ていたこと、第二に、マクベスがコーダの領主になることを、マクベス自身はまだ知らされていなかったこと、の二つである。

他方、心理ドラマ説に立つと、魔女たちにはマクベスのなかに眠っていた悪が顕在化している、あるいは夫を出世させたい、王位につかせたい、と願っていたマクベス夫人の願望が投影されているということになる。後者の説は『マクベス』を近代的ドラマとして読むことを可能にしてくれるが、当時、多くの人々が魔女の存在を信じていたことを思えば、前者の蓋然性は高い。しかし後者の要素もあり、それがこの芝居を近代的なものにしている。

ではシェイクスピアはなぜこの芝居のなかで魔女を描いたのであろうか。当時シェイクスピアが仕えていたジェイムズⅠ世のためだった、と多くの研究者は推測している。ジェイムズⅠ世は『悪魔研究』という書物を自ら著したデモノロジストであり、イギリスでおこなわれた魔女裁判の大部分は、彼が布告した魔術に関する法令(1604)にもとづいていた。これは、魔術師や魔女が魔術に関する行為に手を染めた場合、たとえ相手に物理的な損害を与えなくても、また初犯、再犯にかかわらず、これらの者はいかなる弁明も許されず、絞首刑になるという法令であり、1692 年 12 月、アメリカのマサチューセッツ州のセイレムで行われた魔女裁判（通称セイレムの魔女狩り）も、この法令にもとづいて行われた。

シェイクスピアが『マクベス』を発表すると、この作品は案の定ジェイムズⅠ世を喜ばせた。第一に、ジェイムズⅠ世はマクベスによって殺されたバンクォーの子孫であり、この劇ではバンクォーの子孫は代々王となるとあるからであり、第二に、この作品は魔女の不可思議な力を描いており、それにもともと興味を持っていたジェイムズⅠ世の関心を募らせたからである。

２b）狼男伝説と近現代の狼女小説群

ギリシア神話に起源が辿れる狼男伝説は、規範からの逸脱と社会からの疎外によって、悪魔の観念が具体的な人物に投影されてしまうという不幸を映し出している。人種、階級、ジェンダーの差異は逸脱と疎外の対象を選び出すきっかけとなってきた。これに対し、19 世紀後半以降に書かれた「狼女」に関する小説群は、 悪魔の観念を個別の人間に投影することの歪みと文化的な遺産を反映しており、反デモノロジー意識を基盤にした創作だと捉えることができる。特に英語文学においてこの分野が活発だったのは、特記すべきである。

２c）「赤ずきん物語」における悪魔主義

口承文芸「赤ずきん」物語は狼男伝説に連なる民話群であり、その点では狼男の認識については 2b)の記述と重複する。他方、本研究では、狼男に対峙する少女の行動について、ヴァリエーションによって大きな違いがあることを分析した。狼男を出し抜いて逃げ帰る口承版の物語は、悪魔の力を避けて生きようとする民衆の生活観を表している。さらに、現代ポピュラーカルチャーのヴァリエーションを検討すると、悪魔の表象に浴することでむしろ悪魔の超越性を軽減するか軽視しようとする姿勢が伺え、これもまた反デモノロジー的である。

２d）アメリカの黒塗りミンストレルショーにおけるユーモアと悪魔主義

19 世紀中葉から 20 世紀半ばにかけて英米で大きな人気を博したミンストレルショーは、起源をイタリア喜劇とサーカスにもつ白人系の娯楽であるが、役者が顔を黒く塗ることで、滑稽と劣等、醜悪という道化の一ステレオタイプを、アフリカ系アメリカ人に貼り付けてしまったという差別的な背景を持つ。この芸能は悪魔主義に無意識的で、社会に大きな問題を残した。他方、ミンストレルショーと関連しながら発展したアメリカのミュージカルは、ミンストレルショーの笑い---差別と侮蔑に根ざした笑い——-を避け、別種の娯楽となった。ミュージカル・ショーと反デモノロジーの関係が今後も探られなければならない。

３）オッカムの唯名論と反デモノロジー

11～14 世紀の中世、ヨーロッパでは普遍論争という有名な論争があった。普遍は、個物に先立って実在すると考える実在論と、普遍は個物の経験をもとにして人間がつくった名前にすぎないと主張する唯名論とのあいだの論争である。たとえば実在論者のアンセルムスは「悪魔の自由について」「神はなぜ人間となった」「処女懐妊と原罪」といった論文を著わし、そこでは「悪魔」「処女懐妊（降誕）」「原罪」といった概念が自明の普遍概念として前提にされている。

今日では、キリスト教徒でも、これらの概念の自明性を疑う人が多い。しかしこれらを疑っている人々も、狂気、国家、社会、主権者、臣民などの「普遍」に関してはその自明性を信じて疑わない。そしてそれと同じように中世においても、悪魔も、処女降誕も、原罪も、異端者も、魔女も存在しない、と人々に納得させるのはきわめて困難なことだった。多くの人々にとっては唯名論よりも実在論のほうが「常識」に近かった。

しかもかりに唯名論者たちが、悪魔や処女降誕や原罪や魔女（ないし異端者）はすべて嘘であるなどと公言したら、ただちに捕えられ、火刑に処せられるであろうことは、目の目を見るよりも明らかなことだった。そこで普遍論争において議論されたのは、もっと差しさわりのないテーマ、すなわち人間、犬、薔薇という類は本当に実在する概念か、それともわれわれの心中にある観念（フィクトゥム）にすぎないのか、というテーマだった。

前期のオッカムは心中のフィクトゥムと外界の事物との対応関係を認め、犬という観念と外界の犬は対応しているという比較的穏健な唯名論の立場に立っていた。初期の『アリストテレス命題論注解』にはこうある。「この論拠によってかかる心的形成物［フィクトゥム］は、事物を代示することが可能であり、また諸事物に共通なものであることが可能であり、またそれにおいて事物が知性認識されるところのものたることが可能であること、知性認識作用［インテレクチオ］とかそれ以外の他の性質とかより［、］より以上のものなのである」（大鹿一正訳）。

ところが後期オッカムはこのフィクトゥム説を捨て、インテレクチオ説に向かった。なぜか。諸説あるが、おそらく彼は当時の魔女狩りの蛮行を目の当たりにして、「魔女」というフィクトゥムをなくさなければ、魔女狩りという狂気は駆逐できないと考えたにちがいないというのが本研究の仮説であり、資料は限られているものの、今後、この仮説を立証しなければならない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 23 件）（過去 3 年）

1. Yoshito Takahashi: Individualismus und Hospitalität. Ein Vergleich europäischer und japanischer Verhaltensweisen. （単著）In: Akio Ogawa (Hg.) „Wie gleich ist, was man vergleicht? Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften. Ost und West“. StauFFenburg, 2017 年,p.73-82.

2. 高橋義人「神の眼と人の眼—カント contra スピノザ、そしてゲーテ」（単著）「モルフォロギア」38 号、ナカニシヤ出版、2017 年、37-58 頁。

3. Yoshito Takahashi: Märchen und Mythologie. Die Cinderella-Märchen im Lichte von Fruchtbarkeitskulten.（単著）In: Japanisch-Deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomen. Wilhelm Fink, 2017 年 1 月 30 日, p.177-186.

4. Yoshito Takahashi: Rousseau und Goethe im Transit zwischen Offenbarungs- und

Naturreligion. （単著）In: Sabine Egger / Withold Bonner / Ernest W.B. Hess-Lüttich (Hg.) „Transiträume und transitorische Begegnungen in Literatur, Theater und Film. Peter Lang, 2017 年, p.231-246.
5. Yoshito Takahashi: Ogai Mori als Anti-Faust.（単著）Scientific Journal. Modern Linguistic and methodical- and didactic Researches. No2 (17), VSTU, 2017, p.92-104
6. Yoshito Takahashi: Огай Мори как Аити-ФауетМори. (単著), Scientific Journal. Modern Linguistic and methodical- and didactic Researches. No2 (34), VSTU, 2017, p.111-124
7. 高橋義人「ロークス・アメーヌスとイギリス式庭園」（単著）「平安女学院大学 研究年報」18 号、平成 30 年 3 月 31 日、p.1-12
8. 高橋義人・大木沙知子「魂の宿った風景――コッツウォルズにみるイギリスの自然保護と観光政策」（共著）「平安女学院大学国際観光学テキスト 資料編」、2018 年、p.73-88
9. 高橋義人「オペラ・ブッファからアメリカ的ミュージカルへ――『メリー・ウィドゥ』とロジャースとハマースティン２世」（単著）、「平安女学院大学. 研究年報」第 19 号、2019 年、p.1-10
10. 高橋義人「慈母のふところに抱かれて――景勝地と庭園の観光文化論」（単著）、平安女学院大学国際観光学部編著『観光学の未来』白川書院、平成 31 年 3 月 1 日、p.138-148
11. 高橋義人「われもまたアルカディアに――18 世紀ヨーロッパの国外旅行」（単著）『観光学の未来』白川書院、2019 年、p.222-236
12. Kazuhiko Tamura: Vergleich und Sympathie. Zum „colonial gaze" in der Völker-Schau und in Peter Altenbergs Ashantee. In: Akio Ogawa (hrsg.): Wie gleich ist was man vergleicht. Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West, Stauffenburg, 2016, S.321-330
13. Kazuhiko Tamura: Die Dingwelt auf dem Zauberberg. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd.15, Heft1. 2016, S.61-77
14. 田村和彦「フォルクスパルクの思想」, 関西学院大学『国際学研究』vol.7(1)(2017), pp.3-14.
15. 田村和彦「ドイツ庭ものがたり」第 20 回（ハンナ・ヘーヒの庭）、関西学院大学出版会『理（ことわり）』2016 年 4 月、pp.10-12
16. 田村和彦「ドイツ庭ものがたり」第 21 回（都市のコモンズ）関西学院大学出版会『理（ことわり）』2016 年 9 月、pp.10-12
17. 田村和彦「ドイツ庭ものがたり」第 22 回（移民たちの庭）関西学院大学出版会『理（ことわり）』2017 年 3 月、pp.10-12
18. 田村和彦「ドイツ庭ものがたり」第 23 回（庭に住むひと）関西学院大学出版会『理（ことわり）』2017 年 3 月、pp.10-12
19. 田村和彦「ドイツ庭ものがたり」第 24 回（隠者と小びと）関西学院大学出版会『理（ことわり）』2018 年 12 月、pp.10-12
20. ウェルズ恵子「ヴァナキュラー文化としての「赤ずきん」：少女と暴力の物語」（単著）「立命館言語文化研究」28 巻 1 号、2016 年 9 月、101-114 頁
21. Keiko Wells: Variations and Interpretations of the Japanese Religious Folk Ballad, Sansho-Dayu, or "Princess Anju and Prince Zushio" (2): The Theatrical Tradition in Ningyo-Joruri (Puppet Plays) and Kabuki (単著) Journal of Ethnography and Folklore, New Series (2017 巻 1-2 号) 2017 年 10 月、102-118 頁。
22. Keiko Wells: Variations and Interpretations of the Japanese Religious Folk Ballad, Sansho-Dayu, or "Princess Anju and Prince Zushio" (3): Re-Creation in Modern Fiction, Film, and Children's Literature（単著）Journal of Ethnography and Folklore（1 巻 2 号)）2018 年 10 月, 44-67 頁
23. ウェルズ恵子「ヴァナキュラー文学の研究――定義・課題・提言」（単著）「立命館言語文化研究」30-4、19 年 3 月、133-148 頁

〔学会発表〕（計 21 件）（過去 3 年）
1. 高橋義人「聖遺物と奇蹟――カトリック教会による捏造とその背景」、日本フンボルト協会関西支部総会、同志社大学、2016.1.17
2. 高橋義人「ゲーテ色彩論から見た〈真の科学〉」京都大学　総人・人環・学際セミナー、2017.11.30、京都大学 人間・環境学研究科
3. 高橋義人「江戸情緒はつとに失われ――永井荷風と反近代」第 57 回けいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」国際高等研究所、2018.3.29
4. 高橋義人「ゲーテとフランス革命」朝日カルチャーセンター（大阪）、2018.5.15
5. 高橋義人「ゲーテの提唱する世界文学と世界市民」朝日カルチャーセンター、2018.6.12
6. 高橋義人「京都三山とまちづくり」京都伝統文化の森推進協議会公開セミナー、京都大学こころの未来センター、2018.7.1
7. 高橋義人「ファウストは悪魔と契約して何をしでかしたか」朝日カルチャーセンター（大阪）、2018.10.16
8. 高橋義人「若きゲーテの「神と世界」――「自己凝縮」と「自己脱却」のダイナミズム」ゲーテ自然科学の集い・京都例会、平安女学院大学、2018.11.23
9. 高橋義人「根本現象とは何か――若きゲーテの自然体験と「純粋」体験」ホテル・ビナリオ

嵯峨、アルス・シムラ、2019.6.8
10. ウェルズ恵子「マイケル・ジャクソンと黒人文化のルーツ――多文化理解への道筋を探る」国際理解教育研究会、2016 年 6 月
11. ウェルズ恵子「ゴスペルソングとブルーズ――歌詞研究の立場から」同志社大学アメリカ研究所 春季公開講演会、2016 年 7 月
12. Keiko Wells: Variations and Interpretations of the Japanese Folk Religious Ballad, Sanshō-Dayu, International Ballad Conference (KfV), 48th Annual Meeting, 2017 年 5 月
13. Keiko Wells: Lullabies Created by Child Nursemaids in Japan: Lyrics that Express Observations and Emotions of Peasant Children in Labor. University of Ljubljana, Faculty of Arts, Depart meant of Asian and African Studies, 2017 年 5 月
14. Keiko Wells: Variations and Interpretations of Japanese Folk Religious Ballad, "Princess Anju and Prince Zushio": 800-year tradition. Institute for Ethnomusicology, Scientific Research Center of the Slovenian Academy of Sciences and Arts. 2017 年 5 月
15. ウェルズ恵子「音楽から人権を考える――アフリカ系アメリカ人の歌」平成 29 年度人権問題都民講座、2017 年 9 月
16. ウェルズ恵子、リサ・ギャバート「アメリカの多様なハロウィン」丸善京都本店講演会、2017 年 10 月
17. ウェルズ恵子「アメリカの歌-――源流を探る」京都市市民講座「虹の探求/多用の表現を探る」、2018 年 2 月
18. ウェルズ恵子「『山椒大夫』の広がりと変遷――声、舞台、文学、映像」日本バラッド協会第 10 回大会、2018 年 3 月
19. Keiko Wells: Voice(s) and Gender in a Japanese Religious Ballad Cycle, Sanshō Dayū (Sanshō the Bailiff)（日本民間宗教物語歌（説経節）の展開――「声」とジェンダーにかんする観察）Department of English, Utah State University. 2018 年 4 月
20. Keiko Wells: Sad and Bitter Lullabies of Japan: Creation and Recreation of Child Nursemaids from Labor to Popular Culture）Department of Language, Philosophy and Communication Studies, Utah State University. 2018 年 4 月
21. ウェルズ恵子「ヴァナキュラー文学の研究方法――『ヴァナキュラー文化と現代社会』のエッセンスと主張」東大研セミナー「ヴァナキュラー文化研究の輪郭線―野生の文化を考える、野生の学問を考える」第 8 回研究会)」2018 年 9 月

〔図書〕（計 7 件）（過去 3 年）
1. 逸見喜一郎・田邊玲子・身崎壽・高橋義人他『古典について、冷静に考えてみました』（共著）岩波書店、平成 28 年 9 月 27 日
2. Teruaki Takahashi, Tilman Borsche, Yoshito Takahashi: Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomen. (共編著), Wilhelm Fink, 平成 29 年 1 月
3. 西本清一・内田由紀子・熊谷誠慈・徳丸吉彦・長尾真・高橋義人『「日本文化を考える」研究会　2017 年度報告書』（共著）公益財団法人国際高等研究所、平成 30 年 3 月（全 32 頁）
4. 高橋義人『悪魔の神話学』（単著）岩波書店、平成 30 年 6 月 22 日（全 274 頁+xvi 頁）
5. ウェルズ恵子・リサ・ギャバート『多文化理解のためのアメリカ文化入門』（共著）丸善出版、2017 年 4 月、全 192 頁
6. 亀井俊介・ウェルズ恵子『オーラル・ヒストリー――戦後日本における一文学研究者の軌跡』（共著）研究社、2017 年 4 月、第 7・8 章執筆。
7. ウェルズ恵子（編著）『ヴァナキュラー文化と現代社会』思文閣、2018 年 3 月、全 330 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋義人
Yoshito TAKAHASHI　平安女学院大学　国際観光学部　特任教授
研究者番号：70051852

(2)研究分担者
田村和彦
Kazuhiko TAMURA　関西学院大学　国際学部　教授
研究者番号：50117719
ウェルズ恵子
Keiko WELLS　立命館大学　文学部　教授
研究者番号：30206627

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。